

中日音楽交流の橋をかけよう

趙 維 平

国際日本文化研究センターは私の研究歴において、深まりと広がりを持たせてくれたところである。日本での留学生生活を終え上海音楽学院に戻って教鞭を取ったちょうど一〇年後の二〇〇九年一〇月に、日文研で外国人研究員として一年間の研究生生活を送った。多忙な仕事から抜け出し、再び自分の研究に没頭できる貴重な一年間だった。博士論文は奈良、平安時代における中国唐代音楽の受容に関する研究で、日文研では東アジアと中国の音楽関係に焦点を絞り、中日両国における踏歌という音楽ジャンルの実態調査により、両国の文化性格にまで研究を深めた。そして唐楽の影響を受けた催馬楽の史料に出会って、平安、鎌倉時代まで五百年間のリズム変遷に関する研究も出来た。京都市民を相手に、東アジアの雅楽について講演をしたことも全く新しい体験だった。かなり専門的な質問をされた市民の皆さんの古い文化への関心に驚かされた。日文研の細川周平教授と中日音楽や世界音楽について幅広く交流できたのも貴重な思い出となっている。また、夕日が沈みつつあるセンター周辺を散歩したときの安らかさや快さもまるで昨日のように記憶に止まっている。

国際日本文化研究センターは私にとって、もう一つ特別な意味を持っている。実は上海音楽学院にも国際日本文化研究センターと名前がよく似ている中日音楽文化研究センター（中日音楽文化研究中心）がある。センターは二〇〇三年一月五日、上海音楽学院で行われた「第五

回中国際日音楽比較研究会」が閉幕する際に設立された。中国初の日本音楽研究の専門機関センターとして発足して以来、日本音楽研究や日本の音楽教育に関する学術シンポジウムを主催するほか、日本音楽の演奏や解説など、様々な音楽活動を催しており、日本音楽を中国に紹介する窓口としての役割を果たしている。

中国には、日本研究センターがいくつかあるが、芸術文化、特に音楽に関する研究センターはそれまで一か所もなかった。海を隔てた一衣帯水の隣国である日本の音楽、特に日本の古典音楽や伝統音楽について、民間ではもちろんのこと、音楽研究者の間でもあまり知られていなかった。一方、日本では中国の音楽歴史や伝統音楽に関する研究が盛んに行われている。田辺尚雄、岸辺成雄、林謙三、小泉文夫をはじめとする研究者が輩出し、多くの研究成果が蓄積されている。市民センターで開かれた中国音楽関係の講座に足を運んだ一般人も後を絶えなかった。それを思い知らされたのは日本留学や日文研滞在の時だった。

一九八九年に日本文部省国費招待留学生として馬淵卯三郎教授の指導の下で大阪教育大学の修士課程に入学した。初めてのゼミで日本人の学生が解説抜きの『六国史』や中国文献の『通典』を、辞書を片手に通読した姿を見て、感服というか、慚愧というか、複雑な心境だった。大きな刺激を受けた私は図書館で勉強に明け暮れ、史料や書籍と奮闘した日々が始まった。修士課程を終了後大阪大学博士課程に進学、博士号を取得、一九九九年に錦を飾ったつもりで母校の上海音楽学院に戻った。一〇年ぶりの故郷は町並みが見知らぬほど変わったが、日本音楽や日本の音楽研究に対する未研究の状況は依然として昔のままだった。中国古代史や東洋音楽史を専攻にした私は、日本に保存されている史料や日本の音楽研究成果抜きでは、中国やアジアの音楽歴史も語れないことをよく知っている。そこで、中日音楽研究センターを作ろうと

思った。

研究史料の不足に悩んでいた私は一時期助成金の申請に走りまわった日々を送っていた。一九九九年帰国して二年目、日本駐上海総領事が上海音楽学院で開かれた新年コンサートに招待されたのが転機となった。パーティの席で当時駐上海総領事の杉本信行氏に日本音楽資料を集め、上海で日本音楽研究センターを作りたいという話を持ちかけたら、前向きに進めようという快諾をいただき、思いがけない展開を迎えた。当時文化担当の副領事だった野口裕子さんの協力を得て、アジアの文化援助に当たる「草の根」という助成項目の申請に成功した。

書籍リストの作成やセンター設立の企画のため、野口さんは何回も上海音楽学院を視察に訪れた。私たちは書籍購入チームを組み、日本大学の蒲生郷昭教授からの紹介で国立音楽大学附属図書館に勤務していた長谷川由美子氏のご協力で日本の雅楽、能楽、歌舞伎、文楽などの伝統音楽資料や、研究用の楽書などのリストを作り、二年間もかけて、一千万円相当の資料をやっと揃えた。その中には「日本国史大系」、「国書総目録」、日本音楽史に関する書物、民族音楽学、日本の民謡、音楽に関する辞典類、一級資料、日本明治から西洋系の創作作品および多くの音楽研究書、そして一部の音響や映像製品も含まれている。中日音楽文化研究センターが二〇〇三年末から正式に設立された後、センターの所蔵資料は一般公開するようになった。中国唯一の音楽専門資料室として、全国の研究者に日本音楽を調べるのに必要な資料を提供している。

中日音楽文化研究センターは国際日本文化研究センターと名前がよく似ていて、双子のように聞こえるが、学術研究能力において大きな差がある。しかし、文化交流の窓口として果たした役割は同じである。日文研にいる間、文学、歴史学、民俗学、美術など多分野にわたる研究

発表会や学術シンポジウムに出た経験も帰国後センターのイベント企画に役立った。

センターは研究者に資料利用の便宜を図る一方、日本音楽を中国に紹介する研究機関として位置付けられている。ことに正倉院の楽器の資料や日本に伝えられた中国古代の琵琶譜、箏譜、横笛譜、催馬楽など、中国古代音楽研究に大変貴重な資料を中国の学者に知ってもらうために、二〇〇五年にセンターにより「唐楽と東アジア古譜に関する国際シンポジウム」が主催された。これまで同じテーマのシンポジウムが四回にわたって行われた。シンポジウムがきっかけで、東京学芸大学の遠藤徹教授、法政大学のステイーヴン・ネルソン教授、神戸大学の寺内直子教授、オーストラリアのシドニー大学のアラン・マレット教授、アメリカのアーカンサス大学のレンブラント・ウォルパート教授、エリザベス・マーカーカム教授など多くのアジア古代楽譜の専門家が上海に訪れた。

国際音楽シンポジウムのほか、センターは年に数回日本から音楽研究者を招き、日本及びアジア各国の音楽に関する講演会、演奏会、ワークショップを計画的に主催している。

二〇〇七年四月に大阪大学の山口修教授が三味線、尺八と箏の演奏者を連れ、センターで上海音楽学院の学生を相手に応用音楽学やアジア音楽の比較研究についてのシリーズ講演を行われた。学生に三味線、尺八と箏の生演奏を聞かせながら、日本化に変容されたそれらの楽器の形態、音律や音色など、中国の元の楽器とはどこが違うのか細かく説明した。そして、上述した楽器で一七世紀に成立した三曲という日本の音楽ジャンルのコンサートも開かれた。生演奏をはさみながら歴史の変遷や理論的解説をする、このようなイベントは中国の学生にとって全く新しい体験となった。

センターは「日本の仏教音楽の楽譜」や「日本における専門音楽教育」をテーマにした講演

も設けた。アジアでも仏教声明のような古い記譜法があるとはまったく驚いたと講演を聞いて衝撃を受けた学生もいた。また、日本における専門音楽教育の講演は、中日における西洋音楽の摂取及びその背景について、同じアジアの国として改めて考えさせられるきっかけを与えたと感想を述べた。

センターは日本の古代音楽だけでなく、近代から西洋音楽の影響を強く受けた二〇世紀前半の日本音楽の紹介にも力を入れた。二〇一一年に五月に、日文研の細川周平教授が「一九三〇年代の日本音楽史」をテーマにした講演で日本の民謡、歌謡曲、流行歌からクラシック音楽の創作に至るまで幅広く日本近代音楽史から多くの例を取りあげ、多彩な音楽様式を展示したうえで分析を加えた。一九三〇年代におけるレコード会社の発展、マスメディアの普及および国民教育のレベルアップがその時代の日本音楽に繁盛をもたらした要因で、その背景には当時の政治行政や経済の発展があると指摘された。

ここ一〇年間、センターは日本、インド、インドネシア、韓国、オーストラリアなど、十数か国の学者を迎えた。敷地面積が三〇平方メートルもない狭いセンターが、学生に世界の音楽に接する窓口を広げた。一〇年前まで日本音楽の研究どころか、基本的な知識さえなかった状態が変わりつつある。私が指導した学生の中で『博雅笛譜』の曲名考―唐楽の変遷をめぐって』(二〇一一年修論)、『三味線の役割形成と歴史変遷に関する研究―地歌を中心に』(二〇一一年博論)、『中日文化のコンテクストにおける尺八の歴史と変遷』(二〇一四年博論)、『シルクロードにおける西アジア楽器の東流に関する研究』(二〇一六年博論)などのテーマで優秀な修士や博士論文を出している。また、卒論に基づいて書かれた論文が中国の音楽研究専門誌に載せられ、中国における日本音楽の研究に拍車をかけている。それもセンターが設立した一〇

年間で挙げた大きな成果の一つと言えよう。

センターは専門音楽研究や教育に尽力する一方、日本の演奏団体が中国で行われるコンサートへの解説や優秀な音楽研究成果の翻訳出版などにも積極的な力を添えている。これまでの中日音楽交流の橋がまだ一本の丸本橋だとすれば、これからの一〇年間は、その橋がもうすこし太く、丈夫にできないかと期待している。専門家の先生方、演奏家の方々、センターとともに中日音楽交流の懸け橋をかけようじゃないか。

(上海音楽学院教授)

(一) 「奈良、平安時代における中国音楽の受容と変容―踏歌の場合」『日本研究』第四三集、

二〇一一年三月

(二) 「日本における唐楽の歴史の変遷―催馬楽の拍子に関する研究」『音楽芸術』二〇一一年 第一期 一八四〜一八九頁